

一、はじめに

コグニティブサービス、チャットボットなどは私たちの日常生活の一部になりつつある今日、教育革新は、教育に携わっている私たちにとっては見逃してはならない重要な課題となっている。社会や経済の著しい発展にともない、育成すべき人材要件には変化が生じてしまう。今後は、単なる知識習得にとどまらず、習得した知識を活用する能力としての「21世紀型スキル」¹が求められている。

これからの社会を生き抜ける人間を育てるために、カリキュラムや教え方などの教育の在り方も変わっていかねばならない。学校現場では教育の在り方が見直され、大学の特色や新たな発想に基づく創意に富んだ教育活動が柔軟に展開されつつある。日本語教育においては、これまで「形式重視」が主流であったが、日本語学習者が日本語を使うことを取り入れる指導法への要求が求められている。そのため、アクティブ・ラーニング、反転学習、協調学習、ピア・ラーニング、PBLなどが日本語教育現場でよく行われるようになってきている。また、ただ学習の「量」を確保するのみではなく、自らの学習に主体的能動的にかかわる（メタ認知的視点をもつ）ことが重要視されるようになってきている。

今後どのような仕事や活動をするとしても不可欠な情報かつ能力を高める先導的教育の充実が必要である。AI時代への教育改革として、当校では財務金融学院では、FiTech、電子情報学院ではスマート鉄道などを掲げて教育革新を進めている。外国語学院では、EdTechにかかわるプロジェクトを提出し、スマート教育の試みに取り組んでいる²。

筆者はこれまでeラーニング教材を活用してオンライン学習と対面学習を組み合わせたブレンド学習を試行錯誤してきている。2015年ブレンド学習の一種であるMOOCによる反転学習を試みた。Web視聴環境があれば、どこでもMOOCの講義ビデオを受講することができる。このことから、学習者はビデオ授業内容を理解できるまで繰り返し視聴し、知識を十分に学習したうえで、対面授業に望むことができる。対面授

¹ ユネスコやOECDなどの国際機関が考案した「21世紀型スキル」とは、批判的思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力、ICT活用能力などのスキルの総称である。日本文科省の国立教育政策研究所は2013年に、将来の子供たちが身につけるべき資質、能力として「21世紀型能力」を提唱した。主に、自発的な学習能力や高いコミュニケーション能力などをさす。

² プログラミング演習、ビッグデータ分析などの授業が行われている。

業では、教師と学習者間の討論だけでなく、プレゼンなどを通じて学習者の相互作用などによる学習効果を高めることが期待できる。よって、今度はスマート教育とアクティブ・ラーニングを有機的に融合して、説明・論述・討論などの言語活動を充実させることで学習者の思考力や表現力などを養成しようとする。

本論ではまずスマート教育とアクティブ・ラーニングについてみる。次に 21 世紀型スキルの育成のために、MOOC を取り入れてスマート教育とアクティブ・ラーニングを有機的に融合した実践事例について報告しながら、その指導法や教育効果を検証する。最後に今後の課題についてふれる。

二、アクティブ・ラーニングとスマート教育

アメリカのキャシー・デビッドソン教授（2011）は「子供たちの 65%は、大学卒業後、現在には存在していない職業に就く」と予見している。英オックスフォード大学のマイケル・A.オズポーン準教授とカール・ベネディクト・フライ研究員（2013）は、「今後 10-20 年程度で、約 47%の仕事が自動化される可能性が高い」と指摘した³。株式会社野村総合研究所（2015）はこれを参考に日本国内 601 種類の職業について、それぞれ人工知能やロボット等で代替されるかを分析した。日本の労働人口の約 49%が代替されるという結果を出した。

現代的な事情を背景に、学校が直面した課題は複雑化、困難化している。世界や社会の様々な状況が大きく変わる中、社会が求める人材も変わっている。2014 年 8 月、日本の文部科学省から全国の国立大学へ、「教員養成系、人文社会科学系学部の廃止や転換」が「通達」された。国立大学から「文系」が消えようとしている。一方台湾の高等教育では教育部から人文学の組織を廃止したり改正したりすることには至っていないが、人文系は専門性や進路との結びつきが弱いので、地域や産業界のニーズに合わせた人材の育成に努めるべきだと注意されている（葉 2017）。

従来の一斉授業がこれからの教育に十分には機能しないと考え、本論ではスマート教育とアクティブ・ラーニングの融合を有機的に図り、実践授業を試みた。本論に入る前に、まずアクティブ・ラーニングとスマート教育についてみる。

³"The Future of Employment: How susceptible are jobs to computerisation(2013)" 『雇用の未来-コンピューター化によって仕事は失われるのか (2014 年)』という論文を発表した。

日本の新学習指導要領では、「どのように学ぶか」において取り上げられているのは、アクティブ・ラーニングである。日本の文部科学省は下記のように定義している。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」⁴

これによると、アクティブ・ラーニングには発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、プロジェクトワークやディスカッション、プレゼンテーションなど多種多様な形態が存在している。

竹内(2015)は真のアクティブ・ラーニングとは知識・技能を統合して思考を深め、その結果を自ら判断して表現しながら、何らかの目的を達成していくような学びだとしている。溝上(2014)では、アクティブ・ラーニングについて「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化をともなう」と説明している。

アメリカの National Training Laboratories が授業から半年後に内容を覚えているかどうかを、学習形式の学習定着率について調査をし、ラーニング・ピラミッドを提出した。このピラミッドでは、学習形式と学習定着率のかかわりが明確に見られる。アクティブ・ラーニングが学んだことはより効果的であることは、ラーニング・ピラミッドでも明確になっている。本論ではこれを参考に、授業設計を行うことにした。

先進国諸国でははやくも 1990 年代後半からスマート教育の普及に向けた動きが推進されてきている。米国、英国、韓国、日本などでは教育に ICT を活用し、21 世紀型スキルの育成を着実に実践している。2017 年第一回関西教育 IT ソリューション EXPO が大阪で開催された。未来の学びゾーンには STEM 教育、プログラミング⁵、

⁴ 文部科学省中央審議会(平成 24 年 8 月 28 日)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)』

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

⁵ 2020 年から日本の小学校ではプログラミングを必修科目とする。

Fab ラーニング、EdTech、ビッグデータ、AI ロボット、VR.AR などが取り上げられている。そして、最新の先導的な教育事例が紹介されている⁶。

台湾では、21 世紀型スキルをもつ人材を育成するために、スマート教育に期待が寄せられている。1990 年代後半から ICT 環境の整備、教材の開発、教師の育成といったスマート教育を支える基盤整備が進まれてきたが、バックヤードの進展より、学習そのもの ICT 化がやや遅れていることは現状である。

野村総合研究所 (2013)⁷では、スマート教育について次のように説明している。スマート教育とは「教育のあるべき姿と現状のギャップを、ICT を利用することで埋める」ものと定義する。教育のあるべき姿は「教育者側の負荷を抑えつつ、学習者の学習効果・見識の広がり最大化する」と定義する。本論では、学習における ICT 化をスマート教育とする。

三、実践

これまでの「詰め込み教育」では知識の正確さや量を問う講義が主流であり、受動的学習の知識だけでは現実社会で起きる課題を解決することはきわめて容易ではなくなる。アメリカが提出したラーニング・ピラミッドにもみられるように、より能動的、より主体的学習ほど学習定着率が高くなる一教育効果が高いといえる。竹内 (2015) は、アクティブラーニングでは学習者が能動的に学習を進め、目的に向かって主体的に知識を活用して「ことば」への思考を深めることが期待できる。

社会で求められる課題発見・探究能力・実行力などといった社会人基礎力、汎用的能力を養成するために、アクティブ・ラーニング型の授業が有効だと考える。ここでは、知識が使える人材を育成するために、「日本社会文化」という授業において、MOOC による反転授業を導入し、スマート教育とアクティブラーニングを展開し、実践授業を試みることにした。具体的にはまず、MOOC により受講生の時間的自由度を拡大し、

⁶ 東京大学先端科学技術研究センター特任准教授高橋智隆「ロボット時代への創造性を養う」、人工知能学会会長山田誠二「人口知能で教育はどう変わるのか? ~教育 XAI の現状と今後の展望~」などである。

⁷株式会社野村総合研究所 (2013. 12. 3) が主催の「第 202 回 NRI メディアフォーラム」で「新たな学びを作る ‘スマート教育’ 教育現場の変貌を支える ICT」について発表した。

<https://www.nri.com/jp/event/mediaforum/2013/pdf/forum202.pdf#search=%27%E3%82%B9%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%88%E6%95%99%E8%82%B2+%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E6%95%99%E8%82%B2%27> (2016. 8 検索)

反転授業などによる主体的な学びを支援する。また、教室ではプレゼン演習を実施し、討論をしたりすることにより、知識の定着や理解の深化をはかったり、社会で実際に活用できる日本語運用能力を養成したりする。

まず、3.1 では、MOOC 教材の概要について説明する。3.2 では実践授業について述べる。

(一) MOOC 教材概要

政治大学は教育部の委託で「2016 年外国語 MOOC プロジェクト」を公募した。筆者はその補助金を得て、「台湾文化藝文活動的日語筆記（台湾の美しさを語る—文化イベント篇）」という MOOC 講座を開講した。まず、MOOC 教材のコンセプトについて概説する（図 1.2）。教材編纂の際には、オーディオリンガルメソッドと認知学習理論を考慮に入れて、教材をモジュールに分解し設計することにした。講義ビデオのほうは主に EverCam というソフトを用いて教材を作ったものとライブで撮影したものである⁸。

MOOC 教材は合計 6 単元であり、各単元は単語、本文と会話文からなっている⁹。さらに、単語の意味と練習、本文説明と句型活用とクローズ練習、会話文の説明とロールプレイに細分化されている。

プラットフォーム上の評価の方法としては、次のようなものが実施されている。毎回の授業の小テストとしてウェブをクリックすると、瞬時にフィードバックがでるようなもの、ある課題についてディスカッションを行うものなどがある。そこには学習者と教材間との相互作用、学習者同士間や学習者と教師・TA とのインタラクションが生み出される。

⁸ 詳細は葉（2016）をご参照。

⁹ 詳細は <http://wmpro.nccu.edu.tw/mooc/index.php#5> をご参照。



図 1 MOOC 講座

図 2 第 2 单元

(二)授業概要

学生の学習意欲が低下し、主体的に自発的に学ぶことが欠如した学生が増加している。2016 年度、MOOC による反転学習を実施したが、「日本語表現にふれる頻度を増やしてほしい」という声があった。このような状況をふまえ、2017 年度の実践では、日本語の使用量の欠如を打開する方略として、2016 年度の方法をさらに発展させて、プレゼン演習が組み込まれたアクティブ・ラーニングの新しい授業スタイルを工夫してみた。ここでは、「個—ペア—全体」という学習形態を重視し、学習者の主体性を活性化しようと実践を試みた。

初日の授業においては、第 6 週から第 12 週までの実践授業プロセス¹⁰について次のように指導した。

- ① 本授業の目的、実施方法などを紹介した。また、アクティブラーニングの有効性を、ラーニング・ピラミッドのデータを用いて説明した。社会に応じた能力育成の重要性を強調した。
- ② グループ分けをし、分担単元を決めた。
- ③ MOOC の構成について説明した。
- ④ Stoller(1997)の ten-step process¹¹について説明した。
- ⑤ 授業中のプレゼン演習の要求について説明した。

¹⁰ その他の週は対面の一斉授業を行うことにした。

¹¹ 1) テーマの中で取り組む内容を考える、2) どのような発表形式にするのかを考える段階、3) 発表まで backward design をしていく段階、4) 情報収集の方法等の必要なスキル、文法事項、語彙等を学ぶ段階、5) 情報収集の段階、6) 様々な情報をまとめたり分析したりする方法を学ぶ段階、7) 情報をまとめる、分析する段階、8) 発表に必要なスキル、文法事項、語彙等を学ぶ段階、9) 発表する段階、10) 自己、相互評価、教師のフィードバック等による振り返りの段階 (興津, 2015:8)

⑥ 前学期やった事例を参考モデルとして提示した。

本実践の目的は理解、問題発見と解答、表現という3つの能力を養成するものである。この学習目標を達成するために必要な言語スキルとして、次の4つを設定した。

- ① MOOCS 内容の文章構成を理解することができる
- ② キーワード、キーセンテンスを抜き出すことができる
- ③ 問題点を見出し、解答を書くことができる
- ④ 読んだことを基に自分の考えをもち、組み立てを考えてプレゼンをすることができる

実際の授業構成としては、事前学習（ステップ1）と授業（ステップ2～4）となっている。本実践においては学習者の思考をアクティブな状態に保つために、具体的な授業は次のような展開が工夫されている。

ステップ1：協働学習、調べ学習

学習者は Web 上で MOOC の教材内容を事前に学習する。グループでその内容からある課題（問題）を見出し、この課題（問題）について協働学習を行い、課題（問題）を解決する。それをまとめて、対面授業でプレゼンを行う。

100 分の対面授業を3つのステップに分けて、それぞれ講義と理解確認、プレゼン演習、討論などをする時間を設定し進めている。

ステップ2：講義と理解確認

まず教師は MOOC 内容について簡潔に講義をする。また、質問による話し合いや小テストにより事前学習した内容の理解や定着を確認する。

ステップ3：プレゼン演習

グループでプレゼンという表現活動を行う。学習者はオンラインプラットフォームで MOOC の内容を学んで理解したことをもとに、その内容を文字や絵などで示したり、新たに調べた解答をまとめたりして発表を行う。

ステップ4：協働学習（討論、話し合いなどといった学習活動）

学習者は一方向的に聞くのみで終わるのではなく、討論や話し合いなどの学習活動により、アウトプットチャンスを増やす。教師と学習者、学習者同士間の相互作用がより多くなる。

授業全体には、講義型、学習者参加型、探求型学習などというアクティブ・ラーニング型の学習形態が組み込まれている。実践授業を通じて、知識の学びだけでなく、「他者に教える」ことも実施する。これらの学習活動の相互の働きで学習内容の理解を高めたり深めたりするとともに、思考・判断・表現のチャンスを増やし、多面的な能力を上げることに繋がることができると思われる。

四、考察

実践対象は「日本社会文化」¹²の履修者 36 名である。スマート教育とアクティブ・ラーニングの融合による実践授業の効果や影響を明確にするために、観察法とアンケート調査を採用して考察することにする。以下、収集されたデータを分析し、今後の授業改善への示唆をしめす。

(一)観察法

観察法により、次のような授業風景がみられた。

- (1) 確認活動により、学習者は MOOC 内容を事前に学習して理解していた。
- (2) 授業に先行して MOOC による言語知識の学習を行ったことで、授業中では言語技術を活用しながら学習を進めた。
- (3) プレゼン演習という表現活動をみると、学習者は協働的に問題の発見・解決に取り組んでいた。
- (4) プレゼン演習は、プレゼン技術そのものの学習だけではなく、内容を理解するためのツールとして活用でき、それが対面の一斉授業において積極的な学習参加態度につながっていった。
- (5) 第 5 週までの学習状況と比べると、討論はより一層活発になった。

総括的にいえば、スマート教育とアクティブ・ラーニングが有機的に結びついていることにより、学習態度には変容がみられたといえよう。

¹² 二年次の選択科目である。

(二)アンケート調査

アンケート調査は5段階評価を用いた。今回の分析で用いたアンケート内容は付録1のとおりである。Q1-Q7は選択項目であり、Q8は自由記述項目である。

Q1「MOOC講義ビデオの学習時間はどのくらいですか。」とQ2「MOOC課題(宿題.オンラインテスト)の学習時間はどのくらいですか。」に対する答えは図1のようにまとめられる。図3に示したように、1時間未満の学習者は1名、1-2時間の学習者と2-3時間の学習者は0、3-4時間の学習者は2名、4-5時間の学習者は4名、5-6時間受講の学習者は24名、6時間以上の学習者は4名である。つまり、5時間以上の学習者は77.7%であるので、学習者はビデオ受講に対して意欲的に取り組んでおり、時間外学習が確実に増加したことがいえよう。しかし、「ぜんぜん取り組んでいない学習者も一人いる。

Q2の場合、1時間未満の学習者は3名、1-2時間の学習者は3名、2-3時間の学習者と3-4時間の学習者は0、4-5時間の学習者は7名、5-6時間の学習者は12名、6時間以上の学習者は11名である。2時間以下の学習者は16%占めているので、課題のほうはやや簡単ではないかと考えられ、今後改善すべきである。MOOC講義ビデオを閲覧せずに直接に課題をやった学習者がいることが分かる。その理由としては、課題の成績を小テストとされているからと考えられる。

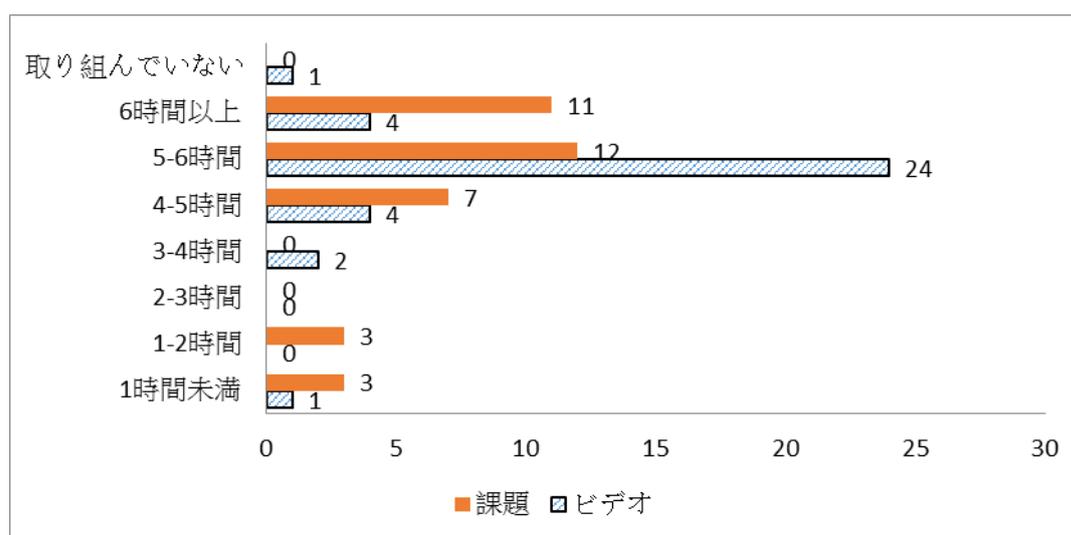


図3 MOOCの学習時間

Q3「活気のある授業だと思いますか。」に対する答えは図4のようになっている。「そう思う」と答えたのは25名(73%)、「どちらかといえばそう思う」と答えたのは8名(24%)、「どちらともいえない」と答えたのは1名(3%)である。「あまりそう思わない」と「そうは思わない」と答えたのは一人もいない。授業においてはプレゼン演習、討論、確認などの学習活動を行うことにより、受動的な学習から能動的な学習に変わり、学習者同士のやりとりを促進することができた。

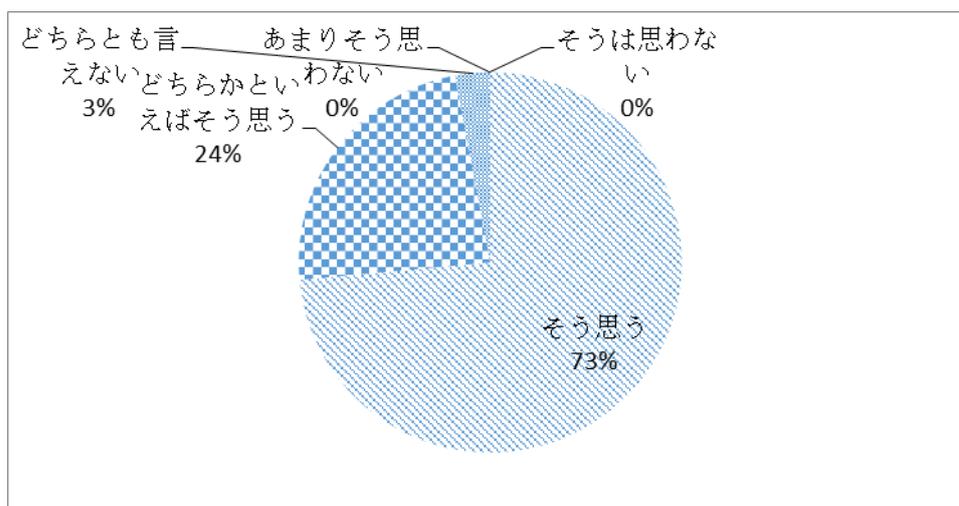


図4「活気のある授業だと思いますか。」

Q4「授業は日本語学習に役立つものですか。」に対する答えは図5のようになっている。「そう思う」と答えたのは20名(56%)、「どちらかといえばそう思う」と答えたのは8名(22%)、「どちらともいえない」と答えたのは7名(19%)、「あまりそう思わない」と答えたのは一人もいなく、「そうは思わない」と答えたのは1名(3%)である。習得、活用、探究、表現、討論という学習プロセスにおいて、学びが深まることができたので、日本語学習に役立ったと感じたのであろう。

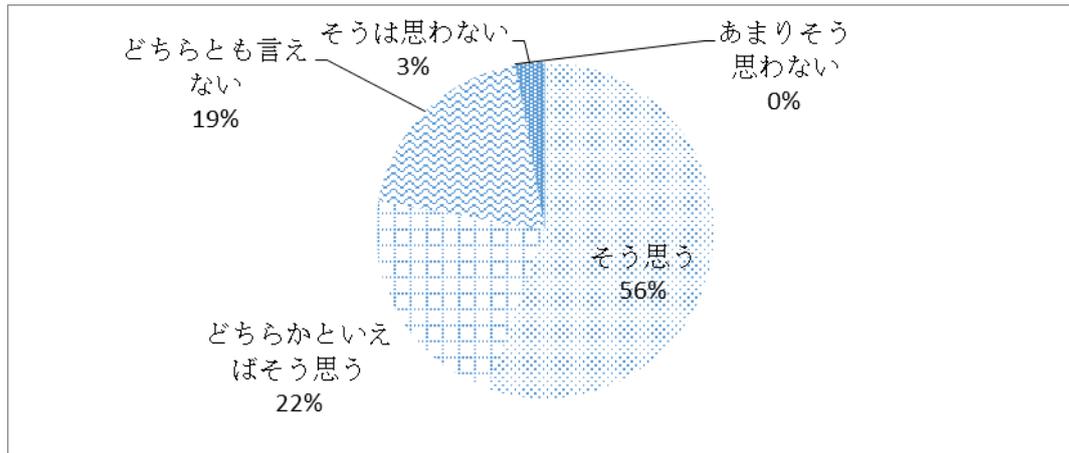


図5「授業は日本語学習に役立つものですか。」

Q5「教室では発言しやすい雰囲気ですか。」に対する答えは図6のようになっている。「そう思う」と答えたのは20名（55%）、「どちらかといえばそう思う」と答えたのは8名（22%）、「どちらともいえない」と答えたのは6名（17%）、「あまりそう思わない」と答えたのは1（3%）、「そうは思わない」と答えたのは1名（3%）である。対面授業において内容に関する課題では、学習者はより積極的に発言した。そして、他者との協働や相互作用により、自らの考えを広げたり深めたりすることに繋がっていく。

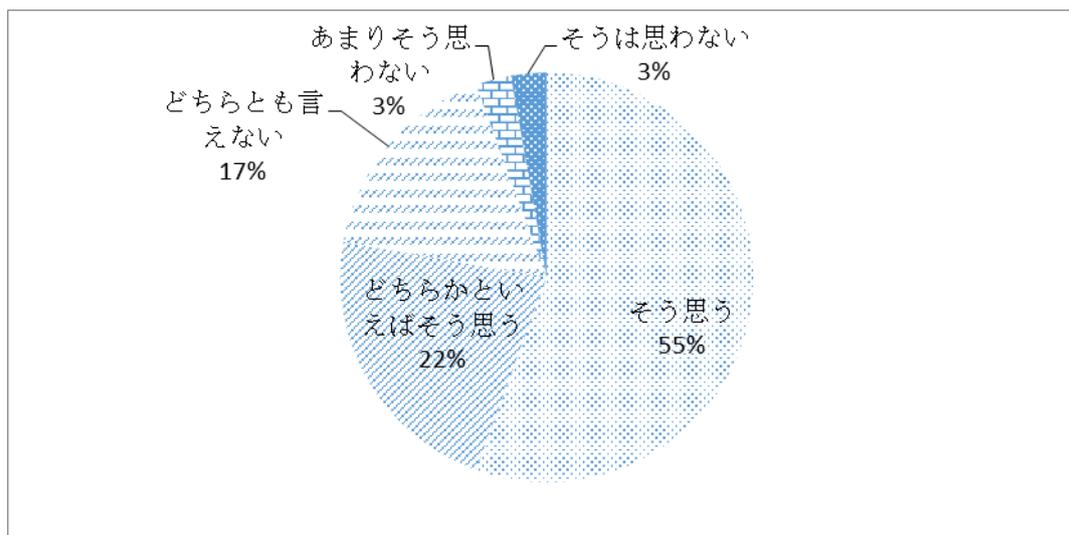


図6「教室では発言しやすい雰囲気ですか。」

Q6「授業内容について自分自身でもさらに深く調べたい」に対する答えは図7のようになっている。「そう思う」と答えたのは20名（55%）、「どちらかといえばそう思う」と答えたのは10名（28%）、「どちらともいえない」と答えたのは5名（14%）、「あまりそう思わない」と答えたのは一人もいなく、「そうは思わない」と答えたのは1名（3%）である。この授業を受けて知的好奇心が刺激され、授業内容について自分自身でもさらに深く調べたいことがわかる。これは自発的な学習に繋がったことがいえよう。

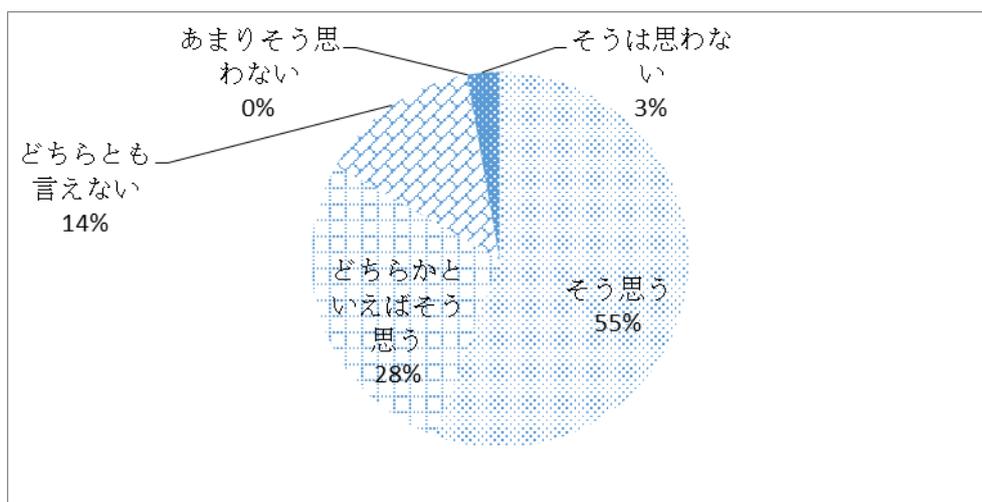


図7「授業内容について自分自身でもさらに深く調べたい」

Q7「授業全体に対する満足度」に対する答えは図8のようになっている。「大変満足」と答えたのは19名（50%）、「やや満足」と答えたのは13名（33%）、「どちらともいえない」と答えたのは4名（14%）、「やや不満足」と「不満足」と答えたのは一人もいない。学習者は授業全体に対して、肯定的な評価をもっているといえよう。

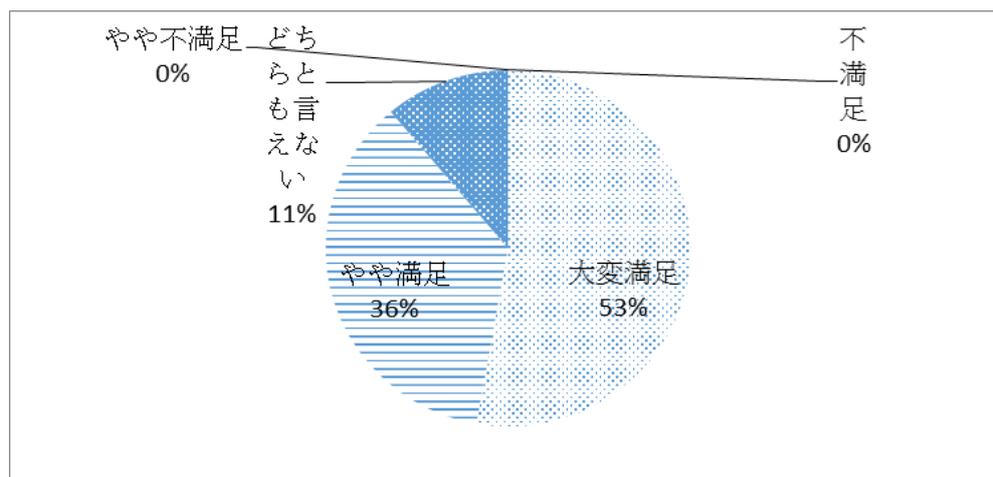


図8 「授業全体に対する満足度」

総括的にいえば、スマート教育とアクティブ・ラーニング教育の実現により、教育の様子が一変した。教室での一斉授業から、学びが多様化になっている。また、学習者の自発的な学習能力が向上した点、思考力や発見力や表現力などが身についた点などが実践授業の効果として挙げられる。

自由記述には、「学者同士は話し合ったりした」「グループで協力して資料を調べ、課題解決をした」などの学習者同士の協働学習がみられた。学習者は能動的に学習に取り組んでいることが分かる。しかし、「モチベーションを維持するのが難しい」「スケジュールの管理が難しい」「MOOCより教科書のほうがいい」などの声も見られる。

五、終わりに

本実践は知識のインプットはWeb上のMOOCで済ませ、教室は産出の場として特化した、新たな学びのスタイルが実現できた。また、スマート教育とアクティブ・ラーニング教育の有機的統合による実践を通して、学習過程における様々な学習活動（協働学習、探究型学習、表現活動など）を行うことができた。それにより、課題の発見と解決に向けて協働的に学ぶアクティブ・ラーニングを促進することができた。さらに、実践授業においては、教育のありかたや教師の役割が変わったこともみられる。

しかし、「スケジュールの管理が難しい」「MOOCより教科書のほうがいい」などの声もみられるように、ICT活用に不慣れな学習者もいる。ICT活用の重要性につい

での指導は今後も引き続き進化しなければならない。また、MOOC を用いる場合には、学習の到達度に個人差があると考えられ、今後は学習の評価方法について検討していく必要がある。今度 MOOC によるスマート教育の実践においては、プラットフォームには大量なデータが残されている。これについての分析は今後の課題とする。

付記:本研究は、2016 年政治大学本區外語中心の助成を受けたものである。また、本論は国立高雄第一科技大学応用日語系が主催した「2017 年應用日語教學研究國際學術研討會－跨領域・翻轉・結合」にて発表したものを修正したものである。

付録1 アンケート項目

Q	質問文
1	MOOC 講義ビデオの学習時間はどのぐらいですか。
2	MOOC 課題（宿題,オンラインテスト）の学習時間はどのぐらいですか。
3	活気のある授業だと思いますか。
4	授業は日本語学習に役立つものですか。
5	教室では発言しやすい雰囲気ですか。
6	授業内容について自分自身でもさらに深く調べたいですか。
7	授業全体に対する満足度はどうですか。
8	その他（ ）*ご自由に記入してください。

参考文献

- 赤堀侃司、柳沢昌義、御園真史（2006）「Web を活用した授業改善の実践と考察」
『リメディアル教育研究』第1巻第1号
- 岡本敏雄、伊東幸宏、家本修、坂元昂（2006）『ICT 活用教育先端教育への挑戦』海
青社
- 木村重房（2013）「アクティブラーニングを取り入れた授業について」『総合教育研
究センター紀要(12)』総合教育研究センター,81-90
- 興津紀子（2015）「アクティブラーニングを可能にするプロジェクト型学習」
『TEACHING ENGLISH NOW 英語教師のための情報誌』Vol.31,SANSEIDO,:8-9
- 重田勝介(2013)「反転授業 ICT による教育改革の進展」の可能性『情報管理』Vol.56
No.10 科学技術振興会 677-684
- 篠原裕未、佐藤太一（2013）「ICT 化により変革を迎える学校教育と「スマート教育」
の可能性」『知的資産創造』21 巻、7 号、50-63、野村総合研究所コーポレートコ
ミュニケーション部 <http://ci.nii.ac.jp/naid/40019717723>
- 竹内理（2015）「英語授業におけるアクティブラーニングの実質化をめざして」
『TEACHING ENGLISH NOW 英語教師のための情報誌』 Vol.31SANSEIDO,2-3
- 溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 森山新（2007）「グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学」『比
較日本学研究センター研究年報第3号』111-117
- 葉淑華（2016）「ICT を活用した日本語教育のイノベーション」『“数字化时代的日
语教学实践”』“第十一届全国大学日语教师研修班”
- 葉淑華（2017）「グローバル社会における新たな外国語人材養成について—高雄第一
科技大學を例に」『2017 年 應用日語教學國際學術研討會』吳鳳科技大學、應用日
語學會

日語動詞「凝る」與漢語「凝」之相關考察

王天保

淡江大學日本語文學系 助理教授

摘要

本研究藉由比較日語的「凝る」以及漢語的「凝」，論述兩詞之用法以及語意擴張。日語的「凝る」有(1)肌肉緊繃酸痛 (2)對某事物下工夫 (3)熱衷於某事 (4)液體等凝聚為一體，以及(5)離散之物聚為一體或凝固等用法。現代日語當中用法(1)(2)(3)比用法(4)(5)來得多。意即用法 (1)(2)(3)被認為是「凝る」較為主要之語意。但是若以「用具體事物去理解抽象意義」的認知能力來說，(1)(2)(3)的用法應為(4)(5)之語意擴張而來。本研究將探討「凝る」之語意擴張以及其(1)到(5)之用法關連性之外，並探究漢語的「凝」與日文之不同。

關鍵詞：中日對照、凝る、凝、語意擴張

日本語の動詞「凝る」と中国語の「凝」に関する一考察

王天保

淡江大学日本語文学系 助理教授

要旨

本研究は日本語の「凝る」及び中国語の「凝」を対照し、それらの用法および意味拡張について議論するものである。日本語の「凝る」は(1)肩の筋肉が張る(2)あることに工夫すると(3)物事に熱中する(4)液体など寄り固まって一体となる及び、(5)ばらばらのものが集まって固まるといった使い方がある。現代日本語において、(1)(2)(3)は(4)(5)より使用数が多く、「凝る」といえば、(1)(2)(3)の方が中心的な意味とされている。しかし(4)(5)は(1)(2)(3)の拡張例であることは考えにくく、つまり抽象な物事を具体物を用いて捉えるという通常の認知能力に基づけば、(4)(5)の用法から(1)(2)(3)へ拡張していくのがより自然である。本研究は(1)から(5)までの「凝る」に関する用法の関連性を探りつつ、その意味拡張のルートについて論じ、さらに中国語の「凝」についても検討したい。

キーワード：日中対照、凝る、凝、意味拡張

一、はじめに

日本語には、(1)(2)(3)の「凝る」の用法がよく見られる。

- (1) 肩が凝る。(作例)
- (2) 服装に凝る。(作例)
- (3) 最近パチンコに凝るようになった。(作例)

(1)は肩の筋肉が張るという意味である。(2)服を工夫すると表すが、(3)はパチンコに熱中することを意味する。次の(4)(5)と比べると、(1)(2)(3)はいずれも「凝固」「凝結」といった現象と無関係のようで、比較的抽象的な表現とされる。

- (4) だんだん露が凝って霜になる時節なので、余裕のあるものは、もう今時分から手廻しをするのだと気がついた。 (『門』夏目 1910)
- (5) 湯気ならば、空に凝って雲ともなり。 (『多情仏心』里見 1922)

使用数が少ないが、文学作品では(4)のような「液体など寄り固まって一体となる」及び、(5)「ばらばらのものが集まって固まる」の意を表す「凝る」も見受けられる。(4)(5)はいずれも視覚を通して認知できる「凝固」「凝結」といった物理現象を言葉で表すもので、これら用法の「凝る」は(1)(2)(3)より具体性があると考えられる。現代日本語において、(1)(2)(3)は(4)(5)より使用数¹が多く、「凝る」といえば、(1)(2)(3)の方が中心的な意味とされている。しかし(4)(5)は(1)(2)(3)の拡張例であることは考えにくく、つまり抽象な物事を具体物を用いて捉えるという通常の認知能力に基づけば、逆の拡張ルートが考えられる。本研究は(1)から(5)までの「凝る」に関する用法の関連性を探りつつ、その意味拡張のルートについて論じたい。また(4)(5)の「凝る」は中国語に訳せば、それぞれ「凝結」「凝聚」に当たる。これに対し、(1)(2)(3)は中国語の「凝」には対応せず、「僵硬緊繃」「講究」「沉迷」などの表現に訳される。この現象から、中国語の「凝」の意味は日本語のそれに比べて狭く、より抽象的な意味では使用されにくいこと

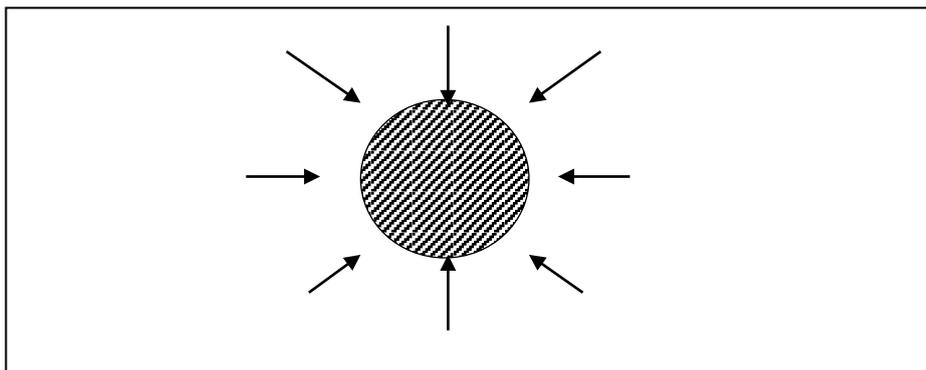
¹ KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、無作為で503例を抽出し確認した結果。(1)の用法は71例、(2)の用法は336例、(3)の用法は86例、(4)(5)の用法は10例である。

が推測される。本研究では日本語の「凝る」に加えて、中国語の「凝」についても検討したい。

二、先行研究及び問題点

数少ない「凝る」に関する研究に、国広(2006)がある。国広(2006)は「比喩的現象素²⁾」を用い、(1)(2)(3)の「凝る」の核意味は「一点への力の集中」であると分析した。そして、(1)(2)(3)の「凝る」はそれぞれ「肩の筋肉の硬化、鈍痛などを主観的にその部分に筋肉中の力が集中した結果」、「集中的に工夫を重ねること」、及び「あることにばかり趣味を集中させ、ほかのことに気を回さない状態」を表すと述べている。

【図1】³⁾「凝る」の比喩的現象素



国広(2006)では、(1)(2)(3)の分析がなされたが、(4)(5)の「凝る」に関する用法説明がなく、「凝る」の(1)～(5)の「凝る」用法間の関連性も言及されていない。

また(4)(5)の「凝る」はいずれも中国語の動詞「凝」に対応しそれぞれ、(4)は「露水凝霜」(5)は「於空中凝結成雲」という翻訳が考えられる。これに対し、(1)(2)(3)は中国語の「凝」に対応せず、訳語として「僵硬」「講究」「沉迷」などが取り上げられる。本研究は日本語の(1)～(5)の用法間の関連性を探りつつ、中国語の「凝」と日本語の「凝る」の相違を併せて検討したい。

²⁾ (国広 2006)は多義語を説明するための共通の場面を抽象化したものを「現象素」と呼んでおり、また目に見えない状態を比喩的に図式を用いて視覚化するものを比喩的現象素としている。例えば、体温や体重の変化をグラフで示すようなものがある。(国広 2006 : pp.51)

³⁾ (国広 2006 : pp.51)による。

三、日本語の「凝る」に関する意味分析

(一)物理現象を表す「凝る」

「冷えて固まる」という物理現象の意を表す「凝る」は現代語において使用例が少ないが、次の例文は見つかった。

- (6) ⁴ベランダの鉢植えにやるための汲み置きの水が 凝っていました。その日は氷が解ける昼ごろに水やりをしました。
- (7) ⁵水をそこまで深く過冷却すると、その先には驚くべき現象が待っています。結晶化しないまま、固く 凝った 状態をガラス状態あるいはアモルファスと呼びますが、水には2種類のガラス状態があるらしいのです。

(6)(7)において、「凝る」の概念は「温度がある程度下がる」「液体や離散していた成分が集まる」「固体に凝り固まる」によって形成される。これは視覚で観察できる物理現象であり、われわれ人間が最も認識しやすい具体的な現象ともいえよう。また次の例も具体的な物理現象として考えられるが、「凝る」の意味特徴は少し異なる。

- (8) 血が 凝る。(『日本語大辞典』 pp.806)
- (9) 「その気が、天に 凝って、雲となり雨となってまた地に落ちてくる。これが、ある時は雪となる」。(少納言)
- (10) 凝る 雲の底を抜いて、小一日空を傾けた雨は、大地の髓に浸み込む迄降って歇んだ。(少納言)
- (11) 「馬鹿め！」振りかえった奇怪な老婆が、ふと口から息を吐くと見れば、一道の白気の 凝って、空中高く虹をえがけば、その虹の中よりへんぼんとして舞い下りたのは、無数の蝙蝠。—ひらひらひら、はたはたはた—。(少納言)

(8)の「凝る」は「液体が集まる」「かたまりとなる」という意味特徴によって形成され、液体の血が血の塊になることだと考えられる。また(9)(10)の「凝る」の意味特徴は「離

⁴ (<http://okwave.jp/qa/q7280681.html>)

⁵ (<http://theochem.chem.okayama-u.ac.jp/wiki/wiki.cgi/matto?page=%A5%A2%A5%E2%A5%EB%A5%D5%A5%A1%A5%B9%C9%B9>)

散していた成分が集まる」「ある物質のかたまりとなる」であり、大気中の気体分子が集まって雲のかたまりとなる様子を表す。さらに(11)は怪奇話で、古文による描写であり、その意味は「奇怪な老婆が、ふーっと口から息を吐いたかと思うと、一本の白い気が固まって、空中高く虹を描き、その虹の中よりゆらりと無数の蝙蝠が舞い降りてきたのであった」である。この文の「凝る」も(9)(10)の例と似ており、「離散していた成分が集まる」「ある物質のかたまりとなる」が意味特徴となる。そして(6)から(11)の「凝る」はいずれも視覚的に確認できる具体的な現象を描写する際に用いられるものであり、一次的意味だと考えられる。あるものが「凝り固まる」という意味で使われる「凝る」における主語及び、形成物は上記の物理現象に出てきた大気、血、結晶、雲といったものだけではなく、より抽象度が高い次の文のようなものもある。

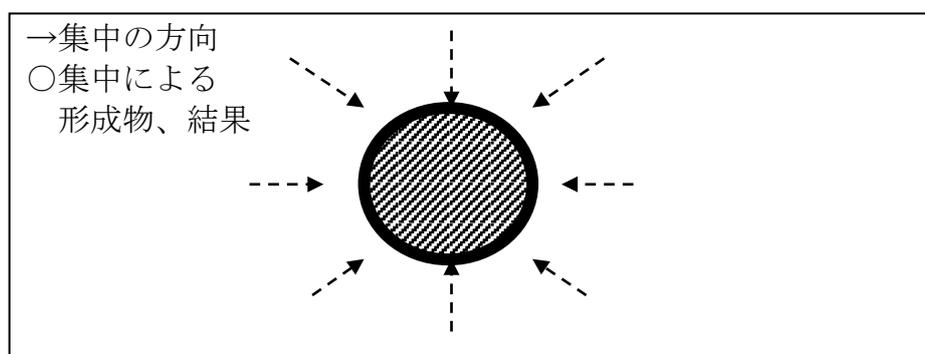
(12) そうではないのだ乙姫、日頃から自分の胸中に思いつめていたのが夢に凝ったのだ。 (少納言)

(13) 『おくのほそ道』にはそういう種類の、一度知ったら忘れられぬ、まるでその土地の精が 凝って 句となったような句が多い。 (少納言)

(12)(13)の「凝る」は「凝結」の意を表すが、主語の部分が水分、大気などよりさらに抽象化されたものとなっている。「液体や離散していた成分」に喩えられた「胸中につめた思い」や、「土地の精」といった目に見えないものが集まり、それぞれ「思想のかたまり＝夢」、「句のかたまり」となる。これらが比喩の用法に属するものである。

以上の用法について、国広(2006)では説明がなされていないが、本研究は次のように補足し解釈する。

【図2】



【図2】に示したように、「力が一点に寄り集まった結果、あるかたまりとなる」という認知プロセスが考えられても、そのプロセスには、真ん中の形成物のほうがよりプロファイルされる。形成物に焦点が当てられるため、これまでの物理現象の例において、「成分が集まる」という意味特徴より、「ある物質が集まり大気、血、氷、雲、匂などの形成物ができる」という意味合いが強まる。ところで、物理現象の「凝る」及び(1)(2)(3)に関係する用法はすべて「寄り集まる」という意味特徴を有するため、国広(2006)で述べられた「一点への力の集中」という「凝る」の核意味を抽出し、それらを解釈することができる。決して(1)(2)(3)の用法が先に主要の用法として出現し、物理現象を表す用法が後で加えられるとは限らないといえる。

(二)身体部位の変化を表す「凝る」

「凝固」「凝結」といった物理現象を表すだけでなく、「凝る」は次のような身体の症状を表す用法もある。

(14) 中学、高校の頃からよく肩凝りを起こしていたので、『アッ、また、**肩凝**っちゃったかな?』と軽い気持ちで日頃から行っていた福嶋整形外科病院に行きました。 (少納言)

(15) これからまた徹夜仕事になりそうだ。**肩**が重く 凝っている。 (少納言)

(14)(15)は現代日本語においてよく見られる「凝る」の用法である。二例における「凝

る」は「肩の筋肉がぎゅっと寄ってしまう」「硬くなった部位が形成物として残る」という意味特徴を持つ。これらを物理現象の「凝る」と比較すると、類似した意味特徴の共有度が高い。上の例では、「凝る」の主体が「肩」という部位であったが、「本来弾力のある肩の筋肉が寄って固まる」という部分に焦点を合わせると、この意味として使われる「凝る」はメタファー⁶による用法だと認識できる。

- (16) シャンプーはいつもよりマッサージがきいてて良い感じでした。口を空いで寝そうになりました。頭も肩が凝るように、凝るのだと思います。ほぐれたような気がして、気分が良くて元気になりました。 (少納言)

(16)では、「凝る」部位がさらに比喩的に拡張していき、頭も「凝る」ようになる。つまり頭の筋肉も肩のようにぎゅっと寄って固まるという意味で「凝る」が使われるようになった。そして「凝る」身体部位がさらに広がれば、以下の例も可能になる。

- (17) 身体症状としては、肩や背中がひどく 凝る、疲労感がある、頭が重い、暑くもないのにほてったり汗をかいたりする、頻繁におしっこに行きたくなるなど、女性の更年期とほぼ同様の症状が現れます。 (少納言)
- (18) 遊びのせい、付き合いのせい、疲れ気味。マッサージを受けたが背中が凝って頭までいたかった。 (少納言)
- (19) ざわめきの中で声を張りあげた。自分で出した声が頭の芯に響く。首筋が固く 凝っていた。電話口に出た上司は、負けずに大声で水巻をねぎらった。 (少納言)
- (20) 僕も偏頭痛持ちだから、首から背中にかけてすごく 凝るんだけど、今とか超スッキリしちゃってる。 (少納言)

本来、肩の症状を説明するために使われる「凝る」は頭部だけではなく、背中、首筋、首から背中までの広範囲の症状の説明にも使用できるようになった。(17)から(20)は

⁶ メタファーとは二つの物事、概念の間に類似性が成り立つとき、一方の形式で他方を表現することを言う。「肩が凝る」は、「肩が凝る」と「露が凝る」との間に成り立つ「力が一点に寄り集まった結果、あるかたまりとなる」という類似性に基づいている。

それらの具体例である。これらの例から背中、首筋などの身体部位の筋肉が固まることが想像できる。そして硬くなる部位がさらに拡張し、官能小説には次のような、「乳首が凝る」という例も見つかった。

- (21) 無理やり与えられる快樂に、溶かされていく。小さな突起はじきに芯を持ち、硬く 凝った。 (少納言)
- (22) 「小さいのに、こんなに尖って...けなげなものだ」熱を持ったように疼く先端がつんと 凝っている のが、志信自身にもわかった。 (少納言)

凝る部位が変わっても、肩、背中、首筋、頭、乳首は全て体の一部であり、またこれらの部位は全て「肉がつき、その筋肉は柔らかい状態から硬い状態に変化する」という共通点を共有する。そのため「凝る」を用いることができると考えられる。これはメタファーによる意味拡張と言えよう。実際に調べると、顔、腰、太ももなどの部位の固まりも動詞「凝る」によって表現される。すなわち、柔らかい筋肉が付く部位が収縮したまま凝り固まってしまうことは「凝る」で表現できると考えられる。

- (23) 会議に継ぐ会議の果てに、一度だけ家族で肩の 凝る 食事をして別れた。父のほうは、「ダヴィデ」の予備鑑定を最後まで見届けている。 (少納言)
- (24) 兄の大千葉は、どちらかと言うと、気むずかしい、見るからに肩の 凝る 感じの人であったが、弟の小千葉はめったに怒らず、見かけは兄より与しやすい粹人の感じであった。 (少納言)

(23)(24)は単純に「肩こり」という症状を言うのではない。(23)では、「肩がこる」が用いられ、一緒に居づらく、人を緊張させる雰囲気を表す。(24)では、兄の大千葉といると、肩が凝るほど疲れるという気難しさ、堅苦しきは「肩が凝る」によって比喩的に表現される。二つの例はいずれも「肩こりがもたらす不快感、つらさ」という意味特徴を利用した比喩表現と見られる。

身体部位が硬くなるという解釈で使われる「凝る」について、国広(2006)では、それを「肩の筋肉の硬化、鈍痛などを主観的にその部分に筋肉中の力が集中した結果」であ

ると解釈した。しかし身体部位に関係する「凝る」はほとんどわれわれに具体的な「形成物＝硬くなる身体部位」に連想させ、「一点に力が集中」するだけでは、その形成物の意味特徴を表しにくい。そこで【図2】を用いて次のように説明し直すと、筋肉が寄り集まった結果、筋肉が付く身体部位が硬くなると考えられる。固まった部位がその集中結果としてより焦点に当てられたため、硬い身体部位という具体像が的確に伝わると考えられる。

(三)抽象的な意味を表す「凝る」

物理現象、身体部位の変化だけではなく、「凝る」の現用法では、あることを工夫するという意味で使われるものがある。

(25) 体裁に 凝る 必要はないが、行間は、ある程度あけた方が読みやすい。

(26) 長が百七十二、三センチ、筋肉質でスポーツマンタイプのからだをしています。服装に 凝る 方で、靴なんかもイタリー製だと言っていました。

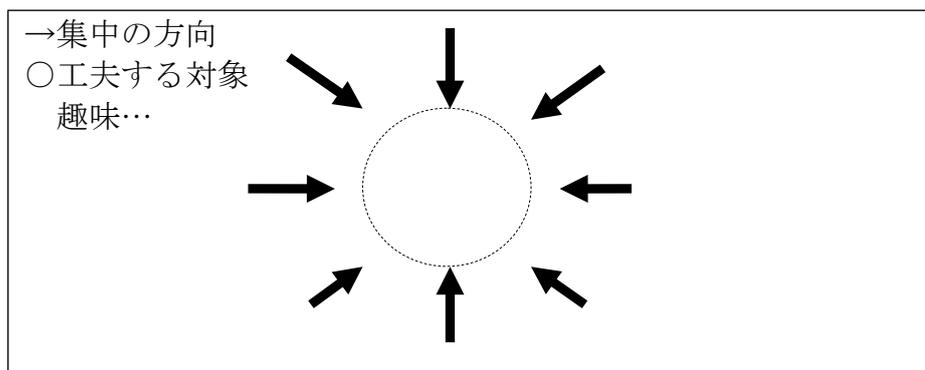
(少納言)

(27) 踊り手は技を競い衣装にも 凝る。 (少納言)

(28) 若い人を中心に、インテリアに 凝る 人が増えている。 (少納言)

(25)から(28)の「凝る」はいずれもあることを工夫する意味を表す。体裁、服装、デザインなどにこだわって、工夫するという意味で使用される「凝る」は一見物理的変化を表す「凝る」とは関係が薄いように見えるが、実は比喩の拡張関係が両用法を繋いでいる。国広(2006)では「一点への力の集中」という比喩的現象素を用いて、この用法の「凝る」を「集中的に工夫を重ねること」と比喩的に解釈した。国広(2006)の説明を補足すると、この用法は物理現象を表す「凝る」とは異なり、形成物より、「一点に集中する」という矢印【図3】を表すプロセスのほうがプロファイルされる。つまりあるものに集中的に工夫した結果、ある形成物ができるということではなく、ある形成物に対して、工夫を行うという動き(図3の矢印)に焦点が当てられていると言える。

【図3】



また「あることにばかり趣味を集中させ、ほかのことに気を回さない状態」で使われる「凝る」を(29)から(33)に示される。この意味で使われる「凝る」はある物質が集まり、その物質の形成物ができるという意味ではなく、むしろ【図3】のように、矢印で表されるプロセスに焦点がおかれ、ある対象（この場合は趣味、物事）だけに対して、一途に思い込むことを表す。

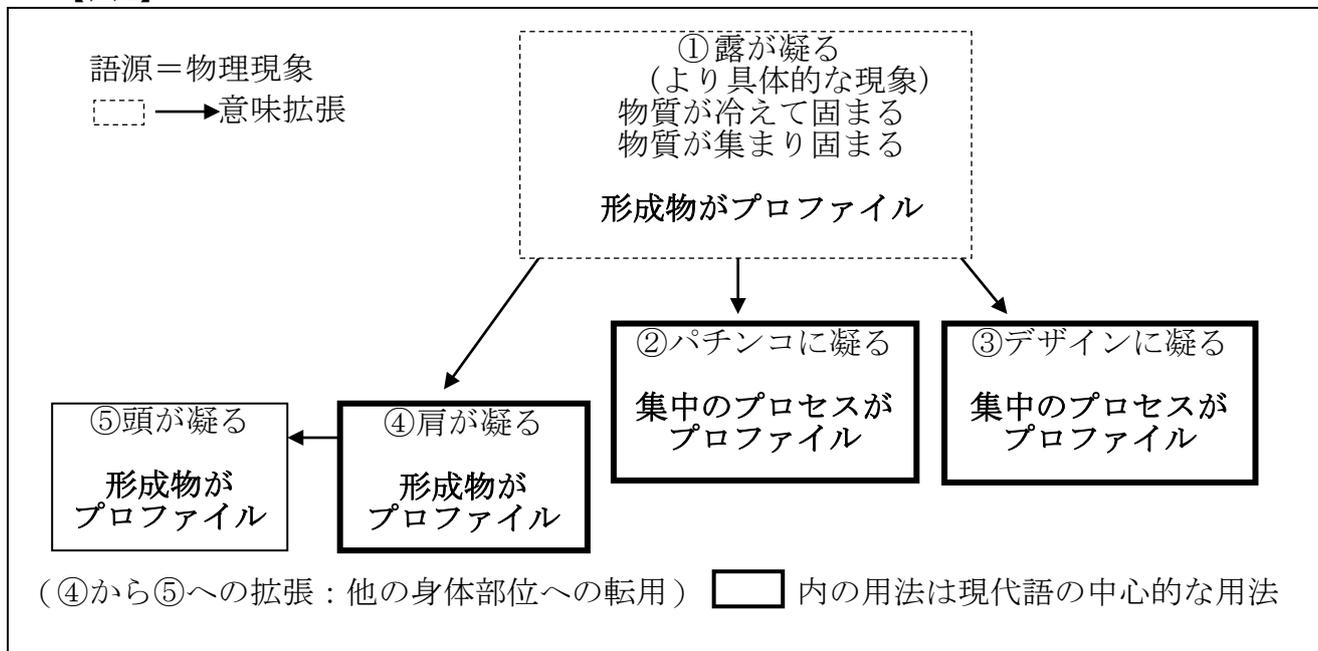
- (29) そうそう、日ごろ主人が盆栽に 凝っていて、いつも家計をおびやかして買っていた支那鉢のかずかずもありました。 (少納言)
- (30) たしかに高学歴、高収入の人で、車に 凝るひとはいますが、それはその人の生活のほんのわずかな部分。 (少納言)
- (31) 郵便局長はどちらかといえば哲学に 凝っていて、ヤングの『夜』やエッカルトハウゼンの『自然の神秘を解く鍵』などをとても熱心に、いく晩もつづけて耽読し、そういう作品から大 部の抜粋を作っていたが、それがどういう種類のものかはだれも知らなかった。 (少納言)
- (32) 女房のやつも、宗教に 凝って、わしをほったらかしにした。 (少納言)
- (33) 最近ちょっとしたマジックに 凝っている 旦那様。ご飯の後にも熱心に練習していました。 (少納言)

(四)「凝る」の意味構造

「凝る」の用法から国広(2006)が主張した「一点への力の集中」という核意味が抽出で

きても、各用法では、プロフィールされる部分は異なると考えられる。これらの「凝る」に関する意味をまとめると、は以下のようなになる。

【図4】



認知プロセスにおいて、プロフィールされる部分によって、物理現象を表す凝るは⑤の意味まで拡張していく。そして何かの理由によって①の可視的な物理現象の意味が薄れ、②③④の拡張意味が主要の現代用法で使われるようになる。

四、中国語の「凝」が表す意味

中国語の「凝」は日本語の「凝る」と類似する用法を有しているが、冒頭に取り上げた(1)(2)(3)のような、日本語の「凝る」と中国語の「凝」は対応しない用法もある。

(一)物理現象を意味する「凝」

中国語の「凝」には物理現象を表す用法がある。これは「凝」の語源の意味に由来すると考えられる。その語源を遡ると、『説文解字』にある「凝」の解釈の中に、「水堅也」(水が凍って固まる)という説明が見つかる。さらに古典にも同様の用法がある。

- (34) 為寒則[凝]冰裂地;為熱則焦砂爛石 (『春秋繁露·循天之道』)

寒いと氷が凍って大地が引き裂かれる。熱いと砂と石が焼け焦げる。

古典に見られる「凝」は「凍る」の意味を表す。この語源の意味は今でも使われているが、現代中国語では「凝」はほかの漢字成分と組み合わせ、二文字もしくは二文字以上で一語として用いられることが多い。

- (35) 巨人公園原本設計的瀑布及水池，到了冬季全[凝]結成冰，形成全然不同的獨特景觀⁷。

ジャイアントキャニオンの元々のデザインである滝と池は、冬になるとすべてが氷に固まって、普段と全く違う独特の景色をなす。

(35)の「凝」は「凍る」の意味で使われるが、形態は一文字ではなく、「結成」と組み合わせ、「凝結成」いう三文字の表現となっている。現代の中国語では「凝結」「凝成」「凝固」といった複合動詞的、もしくは補語が付く形が多用される。また日本語の「凝る」と同じように中国語の「凝」には、「凍って固まる」という意味だけでなく、(36)から(38)のような「ある物質が集まる、固まる」という意味で使われるものもある。

- (36) 彌漫在大氣層中的水蒸氣開始[凝]結成雨，不斷地降到地球上，流向低窪的地方。(CCL)

大気圏に充満した水蒸気が雨に凝結し始め、地球上に降り続け、窪んだところへ流れていく。

- (37) 岩漿活動有兩種，一種是岩漿從火山口噴出地表，然後冷卻[凝]固變成岩石，這樣形成的岩石叫噴出岩。(CCL)

マグマ活動には二種類ある。マグマが噴火口から地表まで噴き出し、そして冷却して岩石に凝り固まる。このように形成された岩は噴出岩と呼ばれる。

⁷ (http://travel.udn.com/mag/travel/storypage.jsp?f_ART_ID=54446)

- (38) 蛋要徹底煮熟, 直至蛋黃及蛋白都 [凝]固; 家禽也必須徹底煮熟才可食用。
(CCL)

卵は卵黄と卵白がすべて固まるまで煮て、しっかり火を通す必要がある。
家禽も必ずしっかり火を通さなければ食せない。

これらの用法は語源と無関係ではない。ある程度まで温度が下がり物質の分子が集まり堅くなるという凍結の物理現象も「寄り集まる」「かたまりとなる」という意味を含んでいる。(36)と(37)はまさにそれらの意味特徴を利用した拡張表現であるといえる。さらに「温度が下がる」という意味特徴を逸脱し、「固まる」という意味で使われる(38)も観察された。また同じ物理現象に関わる「凝」には停滞を表す(39)および、寄り集まるという意味で使われる(40)がある。

- (39) 人類的血液也 [凝]滯 不動。
(CCL)
人類の血液の流れも滞る。

- (40) 氣體物質又逐漸 [凝]聚成 星雲, 最後從星雲中逐漸產生各種天體, 成為現在的宇宙。
(CCL)
気体の物質は次第に星雲として寄り集まり、最後に星雲の中から徐々に各種の天体が生まれて、現在の宇宙になる。

(39)は語源の「凍ると動かなくなる」という意味特徴を用いて、液体の流れが止まる物理現象を表現する例である。(40)では物質が集まるという現象が「集中する」意味特徴によって表される。特に「凝聚」は次の節の「凝」が表わす抽象的な用法と関係している。

(二)「凝」が表わす抽象的な用法

「凝聚」の意味で使われる「凝」には、(40)のように天体現象を表すものだけでなく、抽象物を直接目的語にとる用法もある。

- (41) 報告的起草經歷了一個聚民意、集民智、[凝]民心的過程。 (CCL)
報告の文案の作成は、民意、人民の文化知識、民心を集めるという過程を経た。
- (42) 福建經濟的繁榮 [凝]聚 著台灣同胞的心血, 台灣經濟的發展同樣也包括福建人民的貢獻。 (CCL)
福建の經濟的繁榮は台湾の同胞の心血が凝集したもので、台湾の經濟發展も同様に福建の人民の貢獻を含む。

(41) (42)にある「凝」の目的語はそれぞれ「民衆の文化知識」と「心血」である。「文化知識」「心血」という無形物を有形の「物質」に喩えることにより、「文化知識が集まった結果、報告という形成物ができる」「心血が集まり、繁栄な経済状況という形成物が生まれる」という比喻による拡張が可能になると考えられる。また「寄り集まる」という意味で使われる「凝」は(43) (44) (45)の「凝望」「凝視」「凝神」と大きく関係する。「凝視」「凝望」はある対象に視線を集中することを表すが、「凝神」は精神を集中するという意味である。両用法は、これまでに述べた物理現象の「凝」とは関係が薄いと思われるが、(41) (42)と同じく「寄り集まる」という意味特徴を共有するために、「凝」の拡張用法であると認められる。

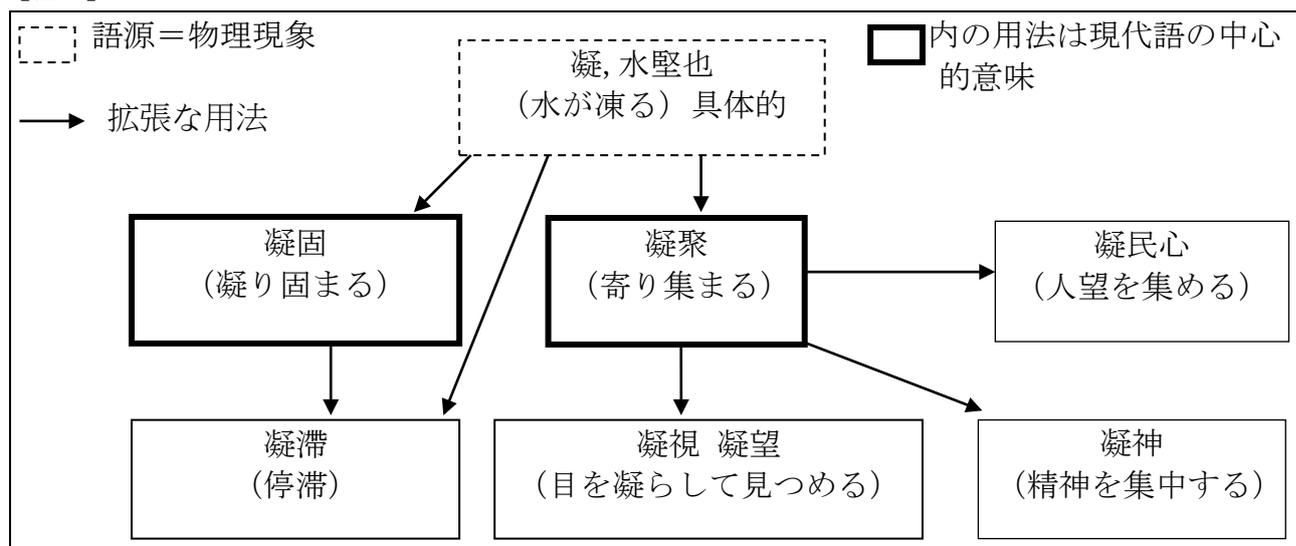
- (43) 這一天, 年輕的英國天文學家哈雷也 [凝]望 著天空, 他並不像人們那樣恐懼不安, 而是用望遠鏡仔細地觀察著。 (CCL)
この日、イギリスの若い天文学者、ハレーも空をじっと見つめていた。彼は人々のような恐れや不安はない。ただ望遠鏡で丁寧に観察しているのだ。
- (44) [凝]視 滿天星星的夜空, 一旦有一顆流星飛逝而過, 就會立即引起你的注意。 (CCL)
星が満天の夜空をじっと見つめて、流れていく流星が一つでもあれば、直ちに君の注意を引き起こすだろう。
- (45) 許多人紛紛拿起手中的照相機、攝像機記錄下精彩的一瞬, 也有許多人 [凝]神遠望。 (CCL)

多くの人は次から次へと手にカメラやビデオカメラを取ってすばらしい一瞬の間を記録したが、集中してじっと遠く眺める人もいた。

(三)凝の意味構造

中国語の「凝」は、現代の用法でも凍るという物理現象を表す表現としてよく使われている点で、日本語の「凝る」と異なる。また、中国語の「凝」は日本語の「凝る」のように直接身体部位、趣味、工夫の対象を主格、目的格にとることはなく、冒頭の(1)(2)(3)は中国語の「凝」には対応しない。しかし、中国語の「凝」は抽象的な意味を持たないというわけではなく、「凝民心」「凝心血」といった抽象的な用法も散見される。また中国語の「凝」の語意の拡張は【図5】のように示される。「凝」の語源は凍るという意味であり、そこから「凝り固まる」および「寄り集まる」を表す「凝」に拡張したと考えられる。この語源および「凝り固まる」を意味する「凝」は拡張用法の「凝滞」に繋がる。一方「寄り集まる」を表す「凝聚」は本来、有形物を目的語にとるが、意味拡張によって、「民心」などの無形物を目的語に取ることもできるようになる。「凝視」「凝神」も「集中する」という意味特徴を持つため、「凝聚」の拡張用法として認められる。

【図5】



五、おわりに

本研究は日本語の「凝る」及び中国語の「凝」を対照し、それらの用法および意味拡張について議論するものである。日中対照から見えてくる特徴は以下のようにまとめる。まず中国語の「凝」は語源の「凍る」という意味から「凝り固まる」および「寄り集まる」を表す「凝」に拡張し、「凝り固まる」および「寄り集まる」を表す「凝」は現代中国語ではより中心的な意味として使われている。さらに、「凝り固まる」を意味する「凝」及び「寄り集まる」の「凝」はそれぞれ拡張用法の「凝滞」「凝視」「凝神」などの用法に繋がる。一方、日本語の「凝る」は物理現象を表す語源の用法が希薄化し、「筋肉が張る」「あることに工夫する」「物事に熱中する」と言うより抽象的な意味が現代日本語の中心的な用法となる。しかし、前述した三つの用法は「凝る」が表す「液体など寄り固まって一体となる」「ばらばらのものが集まって固まる」と言った用法と無関係ではなく、むしろ各用法は「力が一点に寄り集まった結果、あるかたまりとなる」という核意味に基づく拡張関係で繋がれているといえよう。また中国語の「凝」は日本語の「凝る」が表す「筋肉が張る」「あることに工夫する」「物事に熱中する」の用法には対応しない。

本研究は「凝る」及び「凝」に関する言語現象を取り上げて論じたが、両表現の意味拡張の動機付けを解明するには更なる詳しい考察が必要である。その分析は今後の課題としたい。

参考文献

大堀寿夫編（2002）『認知言語学Ⅱ；カテゴリー化』、東京大学出版会

国広哲弥（1992）『意味論の方法』、大修館書店

国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞』、大修館書店

ジョン・R・テイラー（2008）『認知言語学のための14章』、辻幸夫ら訳、紀伊国屋書店

谷口一美（2003）『認知意味論の新展開－メタファーとメトニミー－』、研究社

深田智・仲本康一郎（2002）『概念化と意味の世界』、研究社

靱山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』、研究社、2002年

用例出典：

KOTONOHA 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」 少納言

<<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>>

CCL 語料庫<http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/>